

新テレビ事情

倉本聰



新
テ
レ
ビ
事
情
⚡

倉本聰

著者略歴

昭和10(1935)年東京生れ。東京大学文学部美学学科卒業。34年ニッポン放送入社。37年に退社後、シナリオ作家として主にテレビドラマを執筆。代表作に「文五捕物絵図」「前略おふくろ様」「6羽のかもめ」「浮浪雲」等がある。著書に「あなただけ今晚わ」「うちのホンカン」「前略おふくろ様」「6羽のかもめ」「あにき」「さらば、テレビジョン」

新テレビ事情

昭和五十五年六月十日 第二刷
昭和五十五年七月一日 第二刷

定価一〇〇〇円

著者 倉本 聰くらもと そう

発行者 半藤 一利

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二三
電話(〇三)二六五一一二二一

郵便番号 一〇二

本文印刷 理想社
付物印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

●新テレビ事情／目次

フィクション 7

顔 15

罪犯したるものは 23

あつ、ない！ 32

鬼より恐い週刊誌 40

哀しきマネージャー 50

巷説・茄子の呪い揚げ 64

パリのテレビマン 73

嗚呼！ コマーシャル 84

紅白輪送合戦 93

冠婚葬祭 105

昭和九年は思い込む 113

極秘文書 124

汽車は左へ走る

135

ジnkス入門

144

タイアップ

153

戦イスマズ、日モ暮レズ

163

漢字

176

芸術祭始末

184

健忘症のカナリヤたち

204

好キニナッテハダメ

213

放送記者

233

現代ファン気質

245

僕が愛するNHK

258

テレビ・ヴァイキング論

276

新テレビ事情

● 初出誌 「諸君！」昭和53年4月号～昭和55年5月号掲載

フィクション

「このドラマはあくまでフィクションであって、実在する人物、団体、事件などとは一切関係ありません」

こういう文章を恐らく皆さんごらんになったことがおありだと思います。テレビドラマの最後の所にちよくちよく登場する文章です。

モデル問題などうるさい昨今、恐らくどこかの頭の良いプロデューサーが苦肉の策で考え出した文句だと思うけど、これは、どういうか、たとえば「諺・名言大辞典」なんかに載せておかしくないテレビの生んだ歴史的名文句だと思うんです。この一文で救われた人間が世間にどれ程いることか。何しろこれだけ正々堂々と開き直って断られると文句云いたくても云えなくなっちゃう。

僕などいたって気が弱いから、ドラマで一つの職業を書く時、本職の人に観られるのが一番恐い。医者物を書く時にはお医者さんに観られるのが、刑事ものを書く時には警察の人に観られるのが、調理場を書く時には板前さんに観られて、あんな板前がいるもんかなって云われるのが一番口惜しいし恐い。だから逆に本職の人にほめられるのが何よりも無上の喜びですが——。それがいつからかこの名文句が生れたおかげで、目くじらたてて怒る人たちに「フィクションフィクション」と笑ってみせれば相手もそれ以上大気なく思い、渋々引込まざるを得ない。仲々迫力があるわけであります。

色物の世界の方々が、いたずらをしといて「洒落しやれ洒落」という。そうすると相手が怒れなくなる、あれに発想は似てるんですが、どうも実の所洒落ばかりでもない。洒落にもならない不勉強から来るでたらめまで、一切合財この一文におんぶして「事実と関係ありません」で済みます。いや済ませることが出来る所にこの文の起草者の頭の良さと凄みがうかがえて僕など変に感心するのであります。

どだいドラマは元々フィクションなのに、「このドラマはあくまでフィクションで」とやられると、はて、すると一般の方々は、お断りのないドラマについては事実と信じておられるのだろうかと逆に当方不安になってくる。そんなドラマもあるんだろうか。

僕のごく浅い経験では、外国の映画やテレビドラマに「THIS IS A FICTION——」と断ったのを未だ見たことがないんだけど、してみるとこれは世界に冠たる日本のテレビ界の生んだ一大発明ということになる。しかし、それじゃあ果してモデルとされた人々は、この一文で真底納得して引下るのか。又断ったテレビ人の方は納得させ得たと信じているのか。

問題は全然ちがうんですね。

要するにこれは関係者たちが、夫々責任を回避する為に行う、いわば手続き上のセレモニーである、と、僕はひそかに考えるわけであります。

以前ある中所の会社を舞台にしてドラマを書いたことがあるんです。名前は遠慮します。その会社は自社のPRということで全面協力して下さいまして、職場まで撮影を許可して下さいました。で、プロデューサーは出来上がった台本を持って僕にも一緒に行けと云われまして、行きました。つまり検閲を仰ぐわけです。

広報課長とその上の部長と、総務課長と人事課長と、中間管理職大集合といった会議がありまして色々まずい所を指摘されます。これはちがう。こういうことはない。こういう場合当社ではそういう処置はとらない。次第にエスカレートして参りまして、こういう人

物は当社にはおりません。そういう考え方は当社の人間はいたしません。揚句の果てに、そういうセリフは申しません。家庭でのセリフまでなおされちゃう。こっちも段々カッコとして参ります。でもまア何とか話はつきました。で、まアホツと雑談などありまして、これでおひらきという時に、云わなきゃいいのにプロデューサー氏が余計な一言を云っちゃったんです。「本当にこれで全てOKですね？」

さア、このたった一言が並み居る中間管理職たちを不安にした。自分たちは多分これでもいいと思う。しかし、何か大事な、とっても大事なことを見逃してたらどうしよう。自分たちが検閲した以上、後は自分たちの責任になる。常務や専務や社長や会長がドラマをやらんになって烈火の如く怒られたらどうする。何しろ相手はテレビなのだ。自分たちの犯した小さなミスが、そのまま全国に流れてしまう。あの社はそんな社なのかといわれ、上司には責任をとれと云われる。そんな、何事か重大なことをどうも見逃しているような気がする。さアどうする。

広報部長が「ねえ」って云いました。不思議なことに中間の方は、こういう時決って「ねえ」って始めるもんなんです。ね。「ねえ念の為断りを入れてくれない？ このドラマはあくまでフィクションであって当社とは何の関係もないってことを」

例のお断りのテロップは、忽ち効力を發揮します。つまりあの名文は必ずしもテレビ人だけではなく、そういった立場の方達までも救っちゃうことになるわけですね。

ところでテレビのよくやるもう一つの手があります。これも皆さんきつとごらんになった事があると思うんですけど、タイトルに監修者とか考証家の名前を公表するというやり方です。たとえばほら時代劇でよく見る「時代考証誰之誰兵衛」というあいつ。

これはたしかにそういう人がいないと困る事があるわけで、たとえば一寸した時代物には時代考証家は不可欠だし、医学のことなんか書く際には監修者がいないと手も足も出ません。しかし、一寸意地の悪い見方をする、そういう人を置くことでどこから何か文句が出た場合その人に責任を全部なすりつけ、局が責任を負わないですむように前もって逃げ場をこさえてある、そんな気がしないでもないのです。

それが証拠に、タイトルに監修者の名前を、ラストに「これはあくまでフィクションで——」って出した番組を、見ちゃったことがあります。

懺悔しますと、かくいう僕も十年程前ある経験がございます。その時僕はNTVで、悪徳坊主を主人公に、お寺を舞台にしたコメディを書いたんです。プロデューサーはビビリ

ました。これは絶対、仏教界からクレームがつく。

その頃僕はリアリズムを目指すあまり筆禍ばかり起しておりまして、ついその一寸前にも登場人物の学生のセリフに、民青のことを民コロって書いてちゃって。だってその人物は民青なして絶対云いっこない、民コロって云う筈だから民コロって書いたわけで、何も作者が民青の事を民コロって思ってるわけでもないのに、民青の方が怒鳴り込んでみえてプロデューサーは真蒼と一緒に謝りに行けっという。——そのころはまだ「これはあくまでフィクションで——」ってのが発明される前でして、一緒に行けっというから、イヤだ、民コロと云ったのは俺じゃない。登場人物の学生だ、登場人物を一緒につれてけ、って逃げまして、仕方なく一人でかけたプロデューサーは散々な目にあったらしく。

そんな前科がありましたから今度のプロデューサーは警戒しまして、あらかじめこれは何らかの手を打っておこうっていうんですね。仏教界から文句が出た時、我ら一体どう逃げるべきかその手を前もって打っとくべきである、と。それで我々何日も会議を持ちました。これが原作のあるものなら、原作者に罪をなすりつけられる。しかし不幸にも原作がない。オリジナルであります。

さアこういう時頭の良さを發揮するのが一流大学出のテレビ人でありまして、これは然

るべき監修者を依頼して、文句が出たら全てその人に責任転嫁をはかっちゃおうってことになった。そんなこと引受けてくれる適当な人物がいるだろうか。云ったらば、唯一絶妙な人がいるという。そうだ、あの人ならこの役柄にぴったりだ。あの人を描いて考えられない。誰だって云ったら、今東光和尚だ。あの人を防波堤に押し立てたら仏教界も下手に文句は云わないにちがいない。

どうも今考えてもその時考えても相当無茶苦茶な話なんです、プロデューサーに、一緒にに行けて云われて、馬鹿な脚本家は愚かにもこのこの面識も関係もない今先生にお願いする為に、河内は八尾の里へ出かけちゃったわけです。

話をきかれて大先生はギョロツとあの目を剥かれました。「一寸判らねえ、もう一度云ってくれ。おらア一体何すりゃいいんだ」

「つまり、要するに、用心棒であります。この番組の用心棒になっていただきたいわけがありますッ」

先生は突如割れんばかりの声で笑われた。

「ワッハッハッハ、用心棒か！ 用心棒頼みに東京からわざわざ来やがったか。面白えッ。引受けたッ。俺に用心棒びつたりだ。かまうこたねえ、何でも書いちまえッ。どっかがご

たく、並べてきやがったら、後ア全部俺が引受けてやる。用心棒か。ワッハッハッハ」

——人間の大きさがちがうンですね。

その時先生の膝の上にいた小さな一匹のチワワの姿が、何故か今もって灼きついております。

「ばあさん。茶ア呉れ。この人方ア東京からわざわざ俺に仕事持て来てくれたンだ！」
止しゃあいいのにこういう時プロデューサーは、只もう肩の荷を下した嬉しさの余り、
「いやア可愛いワンちゃんですねえ。おいで。チワワちゃん。こっちいらっしやい」な
ンて犬にお世辞を使いまして、逆に吠えられたりしているわけです。早稲田でリルケな
ンか専攻した奴が——。